

京都学を俯瞰する

——解釈の多様性と揺れをめぐって——

須藤 圭

はじめに

〈京都学〉とは、何か。本稿では、素朴だが、中心的な、この問いに向きあってみたい。それは、定義されることもなく、あいまいなままに用いられつづけてきた〈京都学〉なることばと訣別し、再考をうながすための試みである。

1 氾濫することばのなかで

ちまたに、〈京都学〉があふれている。わたしの小さな書棚には、〈京都学〉をタイトルに冠した複数の書物が並んでいる。これらを読んでみると、次のようなことばに出会う。

- ・「日本学があるなら京都学があってもよからうというのが、数年来の私の主張。」¹⁾
- ・「この頃は、単なる観光ではなく、検定試験を念頭において「京都学」という観点から町歩きをする人々も多い。」²⁾
- ・「『雍州府志』、黒川道祐による本書は、漢文で書いた山城国の綿密な風土記として、王都の歳時の俗を集大成した同じ著者による『日次紀事』と共に、京都学の古典と呼んで宜しいかと思えます。」³⁾
- ・「近時、地域の名を冠して「××学」と称し、地域の特性を論ずることが盛んに試みられている。東北学、江戸学に大阪学等々。わが京都学もその例外ではない。」⁴⁾

これらのことばは、一見、どれも同じ〈京都学〉について述べられたものであるように感じられる。しかし、同じことばでありながら、どうやら、その意味するところは、互いに異なっているらしい。

江戸時代に刊行され、「京都」のさまざまな情報を掲載した『雍州府志』のことを、〈京都学〉の古典と呼ぶいっぽうで、町歩きをするさい、観光ではなく「京都学」の視点がある、という。一方が書物、および、その内容を指しながら、もう一方は、町歩きの目的のひとつとして捉えられている。さらに、〈京都学〉は、地域の特性を論じるものであったり、日本文化を研究対象とした学問、すなわち、日本学に類するものとして位置づけられていたりもする。〈京都学〉なるものは、著者によって解釈に揺れがあると、ひとまずは見なしてよい。

なぜ、このような、あいまいな〈京都学〉が氾濫する状況になったか。そのさいだいの原因は、〈京都学〉なるものが問われてこなかったからに他ならない。現在に至るまで、〈京都学〉の明確な

定義がかたられることはなく、まるで、自明のことのよう存在し、誰もが理解し、共通のことがらを指しているはずだと、誤解されつづけてきたのである。

また、〈京都学〉は、ときに、痛烈な批判にさらされることもある。川村覚昭「『京都学』構築のための教育文化資料研究」⁵⁾は、「学問的手法はどうであれ、京都に関することを細かく調べれば、それで『京都学』になるという観念が出来上がっている。しかし、そこには学問の厳密性はないのであって、果たして京都の「学 (Wissenschaft)」と言えるようなものが成立するかどうか疑問である。」という。「Wissenschaft」はドイツ語で、科学、学問を指す⁶⁾。しかし、〈京都学〉の「学」という一字をもって、学問であることを標榜していると判断し、批判をくわえてよいのだろうか。他にも、平成24年度(2012)京都府立大学地域貢献型特別研究(ACTR)研究成果報告書『学際的・国際的視点にたつ京都学構築のための方法的探究』には、「今まで出されたものの大半は、勝手に京都学と名付けているだけで、別に体系化したものはないし、それぞれの先生が自分の専門分野から短いものを書いているというものですので、学術的な研究成果があるのかどうか。」とする井口和起の発言が記録されている。しかし、〈京都学〉とは、それと名のすることを誰かが許可するものなのだろうか。体系化されたものだけが、〈京都学〉を称することができるのだろうか。さらに、小林丈広「現場からの史学史を目指して」⁷⁾は、「水俣学」や「沖縄学」などの「地域学」の成果を念頭におきながら、2000年代から広まった〈京都学〉にかかわる図書の出版や関連講座の開催を指して、「地域学が対象地域についての物知りや蘊蓄を競うのであれば、水俣や沖縄などで培われた経験が継承されたとはいえないであろう。対象となる地域の自慢話や苦労話を収集することも当然必要であるが、その上で、背後にある社会構造を解明し、抱えている困難を共有しようとする姿勢が求められるのである。」という。しかし、小林丈広の述べる姿勢をもつ〈京都学〉だけが、ひとり〈京都学〉を冠することが許されるのだろうか。「京都」の自慢話だけを集めた〈京都学〉は、存在してはならないのだろうか⁸⁾。これらには、むしろ、〈京都学〉なるものに対する立場の違いがひそんでいといわなければならない。

だからこそ、〈京都学〉それじたいを問われなければならないのである。もちろん、本稿は、〈京都学〉に、共通の基準を与えようとするものではない。本稿が目指そうとするのは、論者によって〈京都学〉に違いがあると知ること、したがって、〈京都学〉を論じるさいには、じしんが用いる〈京都学〉の輪郭をはっきりとさせておかなければならないと知ることだ。それは、〈京都学〉が自立していくための、その序説である。

2 〈京都学〉大分類

個々に用いられた〈京都学〉をとりあげるまえに、〈京都学〉なるものを問い、それぞれの違いを知るための指標として、まずは、大まかな枠組みを示しておきたい。分類にあたって、さまざまなありかたが想定されるだろうが、いま、以下、A～Dの4つのカテゴリーに分けてみた。

- A 営みとしての〈京都学〉
- B 知識としての〈京都学〉
- C 地域のための〈京都学〉
- D 学問領域としての〈京都学〉

〈京都学〉とは、何か。単純に〈京都学〉を分解してみると、「京都」と「学」に分けることができる。それは、京都の学び、京都を学ぶ、京都に学ぶ、京都で学ぶ、などと読んでみることができる。多様な解釈の余地があるけれども、こうした語の流れにしたがって、京都から学ぼうとする行為じたいを指して〈京都学〉と用いることがある。**A 営みとしての〈京都学〉**と呼んでよいだろう。大西辰彦『やさしい京都学』や、NHK テレビテキスト『極める！ 友近の温泉学 西田尚美の京都学』などが該当する。

また、〈京都学〉は、そうして学んで得ることのできる知識を指すばあいもある。**B 知識としての〈京都学〉**と分類する。この〈京都学〉の多くは、〈京都学〉を、たんに「京都」と呼びかえることもできる。ところで、その知識には、薄雲鈴代『歩いて検定 京都学』のように、いっばんに広く知られている知識をいい、その紹介を試みるばあいもあれば、『京都学 前衛都市・モダニズムの京都展 1895-1930』のように、これまで見いだされていなかった知識や「京都」の本質をさぐるうとして新たに解き明かされた知識をいい、高度な議論を展開するばあいもある。このことは、専門書と一般書との違い、あるいは、学術的な審議を十分に経ているものとそうではないものとの違いに区別できることもある。しかし、これらの判断はおこなわなかった。前者に有益な知見が示されていることもあれば、後者を標榜しながら、学術的とはいえない議論がなされていることも多いからだ。

「京都」にかぎらず、特定の地域にかかわるものごとを学ぶことは、その地域に暮らすひとびとがもっとも必要とすることでもある。地域で生まれ、地域に育ち、地域を支えるひとびとにとって、暮らしに密着した地域とかかわる知識を得ることは、大きな価値をもつ。そのため、全国各地で、「地域学」⁹⁾と総称される活動が盛んにおこなわれている。代表的な事例として、「東北学」「横浜学」「丹波学」(京都府亀岡市)などがあり、「地域学」の活動や地域誌の発行は、全国で三千を超えるともいう¹⁰⁾。地域の良さを再発見するとともに、地域づくりに貢献し、また、その地域に生きる自分じしんの暮らしを問いなおすことで、個々のアイデンティティの確立を目指すことを理念とする。この「地域学」の一部と見なすことができる〈京都学〉、すなわち、**C 地域のための〈京都学〉**も存在する。上田正昭監修・芳賀徹・富士谷あつ子編『京都学を学ぶ人のために』や、山上徹編『おこしやすの観光戦略—京都学の構築にむけて—』などがある。

そのいっぽうで、「地域学」とは異なって、「人文科学」「社会科学」「自然科学」、あるいは、「哲学」「文学」「歴史学」といった学問領域としての「学」も存在する。これを強く意識し、新たな学問領域を模索しようと試みる〈京都学〉も展開されている。**D 学問領域としての〈京都学〉**である。多くのばあい、学際的、総合的、複合的がキーワードになっていることは共通するが、違いも大きい。既存の学問領域のなかに、どう位置づけるか。学問領域を横断するのであれば、どの学問を横切り、結びつけるか。あるいは、何を目的とし、何を対象とするか。どのような価値があるか。それぞれの隔たりは小さくないが、同じ方向性をもつ〈京都学〉として、ゆるやかに捉えておいた。この〈京都学〉は、「京都研究」と呼びかえることが可能なばあいも多く、立命館大学文学部京都学プログラム編『京都「に」学ぶ』や、平成24年度(2012)京都府立大学地域貢献型特別研究(ACTR)研究成果報告書『学際的・国際的視点にたつ京都学構築のための方法的探究』などが該当する¹¹⁾。

3 多彩なありかたとその諸問題

引きつづいて、A～Dの分類にしたがって、主に、タイトルに〈京都学〉を冠した個々の図書や論文を眺めてみる。おおまかな分類のなかで個々の特徴にもふれながら、微細に揺れる〈京都学〉の存在を明らかにしてみたい。

A 営みとしての〈京都学〉

大西辰彦『やさしい京都学』の〈京都学〉を見てみよう。本書の〈京都学〉は、「京都を学ぶためのやさしいテキストを作りたい」というように、「京都」を学ぶこと、それじたいを指す。また、こうした学びによって、伝統を重んじながらも革新をつづけてきた「京都」の精神を会得でき、東京の価値観に一元化されつつある現代において、東京と対峙する都の価値観を知り、批判的精神を養うことになるはずだ、ともいい、〈京都学〉の意義を表明する。

平成22年〈2010〉9月、NHK教育テレビで、「極める！」をテーマにして放送された「西田尚美の京都学」のテキストであるNHKテレビテキスト『極める！友近の温泉学 西田尚美の京都学』でも、「京都」を学ぶ行為じたいを指して〈京都学〉が使われている。ふつうの旅とは違い、少し敷居が高く、品のある、魅力あふれる「京都」を、女優の西田尚美がリポーターとなり、視聴者とともに深く学んでいくことを目指している。

ここにとりあげた両者の〈京都学〉は、どちらも、営みとしての〈京都学〉を意味しながら、そうして学ぶことによって得られる知見や目的は、それぞれに違いも見いだすことができそうだ。

B 知識としての〈京都学〉

「京都」にかかわる知識の意味で〈京都学〉を用いるこのカテゴリーは、AからDのなかで、もっとも多くの図書・論文を含むのだが、さらに細分化して考えることもできる。

『京都学 前衛都市・モダニズムの京都展 1895-1930』は、京都国立近代美術館において開催された同展覧会のカタログである。本書によれば、同展覧会は、「歴史事実の回顧にとどまるのではなく、新たな視点を設定し、あらためて「近代京都」の多様な文化の展開について再考」することを目的とする。就中、本書に所収された、山野英嗣「ひとつの京都学—モダニズム都市・京都への視点—」が述べるように、「京都」がもつ、古都イメージとは異なる前衛都市としての側面を紹介したものであった。「京都」に対するありがちなイメージからの脱却を目指しそうとする同展覧会の試みは、まさしく、いっばんに知られていない「京都」にかかわる知識そのものを明らかにしてみせる。

いっぽう、立川美彦『京都学の古典『雍州府志』』は、「京都」にかかわる知識を集成した『雍州府志』という書物じたいを〈京都学〉と呼んでいる。「『雍州府志』には、並んでいる項目名を横に眺めていくだけでは到底想像できない、近世の京都に関するたくさんの情報がぎっしり詰まっている。そういう意味で、これは地志（稿者注—本文ママ）でありながら、実は「近世京都百科」なのだといいたいと思います。」、また、「『雍州府志』、黒川道祐による本書は、漢文で書いた山城国の綿密な風土記として、王都の歳時の俗を集大成した同じ著者による『日次紀事』と共に、京都学の古典と呼んで宜しいかと思います。」とある。前田亮・佐古愛己・杉橋隆夫「京都学デジタル図書館の構築と多言語情報アクセス」が、「京都に関わる過去から現在に至る膨大な知識の集積」として〈京都学〉を指すのは、書物ではなくデータのことだが、ひとところに集められた「京都」にかかわる

広範な知識の呼び名として、これに相似する。

シニア向けのライフスタイル情報誌である『SINRA』（平成28年〈2016〉1月号）は、「京都学入門」と題した特集を組む。「京都」の自然（鴨川）や生き物（オオサンショウウオ）、食（ジビエ）、文学（徒然草）などをとりあげながら、「自然と伝統、産業が支える、世界に類を見ない大都市の姿に、私たち日本人が自然とどう向き合うべきかの答えを見いだす。」という。ここで展開される〈京都学〉は、たんなる知識ではなく、知恵とあってよい。「月刊京都」の698号（平成21年〈2009〉9月）以降、連載がはじまった「鎌田東二の霊性の京都学—京都の生態智を求めて—」も、神社仏閣が集まる「京都」において、環境との連鎖や生きもの同士の相互関係のなかから生まれる「生態智」という知恵を探究しようとする。

知識としての〈京都学〉とひとまとめにしてみたところで、そこには、いくつかの方向性が確認できる。とりわけて、知恵への傾きは、「京都」にかかわる知識が、ものごとをよく理解させ、正しい判断を導くことを可能にしてくれる、という理解がある。それは、次に述べる地域のための〈京都学〉とも密接にかかわっていく。

C 地域のための〈京都学〉

「京都がこれからいかにあるべきかを問うのがまさしく京都学に他ならない」と述べる、京都造形芸術大学編『京都学への招待』は、「東北学」や「大阪学」といった「地域学」を挙げて、「わが京都学もその例外ではない。」という。「地域学」としての〈京都学〉を掲げ、地域の活性化をはかることを課題とする、地域のための〈京都学〉を試みる。もっとも、「地域学」には、現在の地域が抱える問題に対する具体的な解決策を提案するものが多いけれども、本書に、こうした記述はほとんどみえない。本書は、主に、「京都」の歴史にかかわる知識を学ぶなかから、読み手じしんに、地域のありかたを考えさせようとするものだ。その点で、地域に役立つ知恵としての〈京都学〉に傾いている、ともあってよいだろう。

上田正昭監修・芳賀徹・富士谷あつ子編『京都学を学ぶ人のために』も、自らを「地域学」のひとつとして位置づけ、地域を再生していくための議論を重ねている。芳賀徹「はじめに 創造する伝統」は、「古都京都にふたたび文化空間としての高密度性、すなわち都市としての生の統一性を回復するため」といい、「京都」の活力を取り戻そうとする本書の意図を説明する。

ところで、芳賀徹の文章に「京都がさらに世界に向かって開かれ、世界の都市の学芸復興に、これが一つの新しい寄与をなしてゆくことを、私たちは願っている。」とあり、また、この文章と同じく、本書の巻頭に掲げられた、富士谷あつ子「はじめに 未来を拓く町でありうるか」に「京都について学ぶことが、現代社会の諸問題を克服し、新しい未来を拓くことにつながると考えて、この本を世に送ることとする。」とあることは見過ごせない。すなわち、地域のための〈京都学〉は、「京都」という一地域だけにとどまらず、全体に波及する役割をもっていると指摘される。前掲『京都学への招待』にも、「京都の歴史的・地域的特性を探ることは、ひとり京都にとっただけでなく、ひろく日本の歴史と文化がどうあるべきかを問う事であり、そこに京都学を学ぶことの究極の意義があると考える。」とあった。

これに対して、山上徹編『おこしやすの観光戦略—京都学の構築にむけて—』は、都市である「京都」に資するための「京都観光学」のことを〈京都学〉と呼び、交通問題の解決策をさぐり、活性化のための戦略を提言する。現代のニーズにそった新たな「観光戦略が望まれ、かつ理論構築が渴

望されている」状況にあって構築されたのが、本書の〈京都学〉といえる。前掲の〈京都学〉とは方向性が違っているものの、これも、地域振興・地域づくりのためのものと捉えることができる。

D 学問領域としての〈京都学〉

学問領域としての〈京都学〉の萌芽は、早く、山田忠男『随筆京都学のすすめ』にみることができる。山田忠男は、本書において、ドイツ系の大学で講じられている日本学を念頭に、京都文化を対象とした〈京都学〉を提唱する。京都文化のたんなる解説とは異なり、暮らしのなかで京都文化がどのように生きているかを問おうとするもので、学問と呼べるほどのものではないながらも、「もっとも、それらが体系づけられなければ、学にはなり得ないが……。」というように、学問領域として確立した〈京都学〉を模索している。

ところで、こうした学問領域としての志向は、大学組織において問われることが極めて多い。文学部、法学部、理学部といった学問領域によって区分される大学において、〈京都学〉が、いかなる位置をになうかが求められるからだ。

川村覚昭「『京都学』構築のための教育文化資料研究」は、〈京都学〉が「京都の本質を問う学問」であるといい、その解明に求められるアプローチとして、「京都は、千年以上に渡って日本の中心地であり、日本全体と密接に結びついた地域」であるため、「日本全体を視野に入れて考えなければならない」こと、また、「京都人の中には教育に対する強い期待と意欲が漲っていること」から、「教育を京都の本質的問題として捉えねばならない」ことを指摘する。

平成 21 年度〈2009〉、立命館大学文学部に開設された京都学プログラムの入学生へ向けた紹介パンフレットである立命館大学文学部京都学プログラム編『京都「に」学ぶ』には、「京都文化を現実・イメージの両面からとことん追求し、その本質を再発見します。」(B 知識としての〈京都学〉)、「京都学に学んだ成果を、町づくりや景観問題などに応用し、地域社会に還元します。」(C 地域のための〈京都学〉)などとともに、「人文科学の研究分野である文学・史学・地理学などを横断した、新たな地域研究の手法を、長らく日本文化の中心にあった京都で学びます。」とあり、このプログラムが、文学、歴史学、地理学を横断した、学際的な取り組みであることを宣言する。

山田邦和・天野太郎「『京都学』を学ぶための文献ガイド」は、同志社女子大学の現代社会学部システム学科に設置されている「京都学・観光学コース」でまなぶ学生のために書かれた文献ガイドで、〈京都学〉については「京都という地域を対象とした地域学の一つ」といいつつ、「京都という地域にねざした広領域からなる学問体系」とも述べている。天野太郎「教育を通じた重層的な地域へのまなざし—『京都学』」では、「歴史学・地理学・観光学にかかわる幅広い視覚（稿者注—本文ママ。「視角」か）から、「京都」という地域を見据えた講義を行っている。」とし、同時に、「地域の活性化や地域振興、さらには生涯学習への関与といった地域社会での実践」の側面も重視していることが表明されている。

京都地域に立地する大学が連携し、地域社会との協力もはかりながら、教育の発展と地域の活性化を目指して設立された「大学コンソーシアム京都」でも、〈京都学〉がとりあげられている。平成 6 年〈1994〉3 月に発足した「大学コンソーシアム京都」（当初は「京都・大学センター」と称し、平成 10 年〈1998〉3 月に名称変更）は、平成 13 年〈2001〉6 月、「学術コンソーシアム」を発足させ、〈京都学〉の確立を目指した活動も開始した。「京都ブランド創造の一端を担う」とともに、「世界に発信できる「知」の統合と創造を目指し」「人文、社会、自然という従来の研究分野の枠を超え「京都

学」に取り組む」ことが目的であった。それによって、「京都で学ぶ人にとって真に学びがいのある教養学、いわばリベラル・アーツを構築していくこと」と「自分自身の「京都」を主体的に発見していく一助になること」が期待されたようだが¹²⁾、「季刊学術コンソーシアム通信」vol.5¹³⁾の「編集後記」に「学術コンソーシアム事業の柱に『京都学体系化、があります。京都をテーマにこれまでの学問体系にない、全く新しい研究文化を作り上げようとしています。』とあるなど、その体系化に努めていた様子もうかがうことができる。

平成17年(2005)3月には、「学術コンソーシアム」を含む、既存の研究組織を統廃合して、「京都学術共同研究機構」が設置された。この「京都学術共同研究機構」が推進する共同研究のひとつにも、「京都学」分野があった。平成16年度(2004)から平成20年度(2008)の「大学コンソーシアム京都」の事業計画である『大学コンソーシアム京都 第2ステージにむけて』¹⁴⁾では、これまでの研究組織が取り組んできた「京都学」などについて、総合的体系的な研究を推進させるとともに、現実社会、現代的課題を積極的にとりあげていくことが掲げられている。**D 学問領域としての〈京都学〉**から、**C 地域のための〈京都学〉**への移行といえるだろう。平成21年度(2009)から平成25年度(2013)の事業計画である『大学コンソーシアム京都 第3ステージにむけて』¹⁵⁾では、「京都学」を「世界で競争できる唯一のコンテンツ」とし、「京都特有の歴史と伝統文化研究の蓄積を、京都ならではの地域連携型の高等教育につなげ高めるための研究」と位置づけていて、いっそうの進展がみえる。なお、平成26年度(2014)から平成30年度(2018)の事業計画である『大学コンソーシアム京都 第4ステージプラン』¹⁶⁾には、「京都学」に対する特別な言及はない。また、現在、「京都学術共同研究機構」は解消されたものの、生涯学習事業「京カレッジ」^{みやこ}において、「京都学講座」が開催されている¹⁷⁾。

これからの出来事にふれることは避けたいけれども、京都府立総合資料館が、平成29年度(2017)に新館「京都府立京都学・歴史館」となり、京都府立大学とも連携して、「国際京都学センター」が設置されることをとりあげないわけにはいかない。「国際京都学センター」は、『北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告』¹⁸⁾によれば、主な機能として、「京都の風土・歴史・文化等に関する高度で革新的な総合的・学際的研究としての「京都学」研究を構築・推進するため、コーディネーターの役割」をはたし、「地域社会や関係機関と共同して文化的産業の開発・活性化に寄与する。」という。**D 学問領域としての〈京都学〉**と、**C 地域のための〈京都学〉**が共生する機関が生まれることになる。

学問領域としての「京都学」を考えるさいに、再三再読したいのが、平成24年度(2012)京都府立大学地域貢献型特別研究(ACTR)研究成果報告書『学際的・国際的視点にたつ京都学構築のための方法的探究』である。本書は、前掲「国際京都学センター」の設立準備のため、京都府立大学地域貢献型特別研究として採択された同プロジェクトの報告書であり、そこでは、たとえば、「国際京都学にまず一番重要なのは、なにか京都固有の事象、現象、知恵、理念、政策、そういったものを対象とする学問・研究だということの一つ定義したらどうか」(青山公三)、「文化資源の組織化を軸とした京都学というものを提案できないか、つまり、世界を記述する仕組みを京都で鍛え、その仕組みというか方法としてできるとしたら、それが京都学となっていく」(福島幸宏)、「本来の京都学は京都学批判、あるいは京都批判をしなければいけない。」(金澤哲)などと提言され、あるいは、「今方法論自体を一般的、抽象的に検討してみても、生産的な議論にはならないと思っています。」(井口和起)、「高度で革新的な総合的・学際的研究のために、これまでの地域学とは相当異なったス

タンスを要求されることが確認された」(榎木謙周)などと、学問領域としての〈京都学〉に関する議論が重ねられている。拙稿では、本書でとりあげられた議論を、大枠として、学問領域としての〈京都学〉のカテゴリーに組みこんでいるけれども、新たな〈京都学〉が生まれ、更新されていく瞬間であったに違いない。

おわりに

〈京都学〉は、極めて多彩で、あいまいなことばである。その性質のため、混乱をきたし、乱暴で不必要な非難を受けることもしばしばあった。本稿では、その〈京都学〉を、まずは、**A 営みとしての〈京都学〉**、**B 知識としての〈京都学〉**、**C 地域のための〈京都学〉**、**D 学問領域としての〈京都学〉**の4つに大別したうえで、個々の性質を子細に検討してきた。同じカテゴリーのなかでも方法や目的はさまざまであり、また、カテゴリーを横断しようとするものも多くみられたことは、〈京都学〉の多様性をいっそう指し示す結果になった、ともいえる。

ところで、〈京都学〉をめぐる考察をたどっていると、次のような、いずれも短絡的なこたえに出会うことがある。たとえば、〈京都学〉は、「京都」とは何かを問うものだ、と語られることがある。しかし、これが、そもそも、問いにすらなりえていないことは明らかだ。「京都」なるものを自明のものとして知っていないかぎり、その「京都」なるものを問うことはできないはずだからだ。テリー・イーグルトンの「文学とは何か」という問いを思い起こしたい¹⁹⁾。イーグルトンは、「文学の本質^{エッセンス}なるものはそもそも存在しない。」といい、「文学は、昆虫が存在しているように客観的に存在するものではないのは、もちろんのこと、文学を構成している価値判断は歴史的变化を受けるものである。」という。時代や社会的コンテクスト、ひいては、一人ひとりによって、「文学」そして「京都」のはたす役割はかわってくる。

また、たとえば、〈京都学〉は、1980年代から盛んにあらわれていくことになった、「地名」と「学」を結びつけた「東北学」「横浜学」などの「地域学」と、まったく同列に見なされることがある。しかし、〈京都学〉の使用例は、昭和44年(1969)11月発行の『旅の思い出』²⁰⁾に収められた、児玉実用「京都人の旅冥利 京都人の京都知らず」に「たとえ旅先きで尋ねられた時にも、況んや入洛の客に説明を求められた時にも、すぐに一応の答ができるくらいに、つねずねから「京都学」をおさめておくことが京都人の大切な仕事の一つではないだろうか。」とみえている。「京都」に住むひとであるならばその知識くらいは知っておくべき、といい、前掲の分類にしたがえば、**B 知識としての〈京都学〉**になるのだが、「地域学」をさかのぼる「地名」と「学」を結んだ使用例が確認でき、なおかつ、「京都」に関する知識のことを意味するのだから、〈京都学〉は、たんに「地域学」の範疇にとどまるものではない。

さらに、たとえば、〈京都学〉が対象とする範囲を限定しようとするうごきも存在する。より具体的には、平安京域とか、京都府域とかといった具合に規定し、一見、研究対象の明確な定義によって、学問としての厳密さを確立しているように感じられる。しかし、そのばあい、嘉永6年(1753)に刊行された高橋克庵『南遊紀行』に、相模国(現在の神奈川県)の丹田前という溪谷に、桂川という名の川が流れ、京都・嵐山に似た絶景であった、という記事があるのだが、この叙述の考察は、〈京都学〉から排除されてしまうのだろうか。地形や気候、植生といった自然的要素を共有する、い

うならば、地図上に描くことができる範囲だけを対象としてしまっていては、ことばやイメージが喚起する問題に対する考察は取りこぼされてしまう²¹⁾。

〈京都学〉は、自明のものでは、決して、ない。これまでにみてきたように、簡単に分別できるものでもなければ、たったひとつの結論にとどまるものでもない。この多彩であいまいな概念は、だからこそ、多くの論者たちが、自らの立場を明確に表明し、互いの立場をやみくもに否定することなく、認め、批判しあうことが求められている。実践とともに〈京都学〉をめぐる議論へ参画していくことが、〈京都学〉にいつそのふくらみを与え、可能性に満ちた、これからの〈京都学〉を築いていくに違いない。本稿は、〈京都学〉の解釈の多様性と揺れを俯瞰することに終始した。期を改めて、稿者じしんの〈京都学〉を述べなければならないと考えている。

さいごに、本稿でとりあげたものを含め、〈京都学〉を書名・論題にもつ図書・論文を一覧にして、別表で示しておいた。論中でふれることができなかつた点も多く、読み誤りや理解の不十分なところもあることと思う。参照を請う。

付記

本号は、河角龍典先生の追悼論集として編まれている。わたしが、先生から教えを得る機会は数えるほどであったけれども、たとえば、立命館土曜講座「地理学・デジタル人文学からの「京都学」と地域連携」(平成25年〈2013〉6月15日)では、平安京の風景をコンピューター上に3次元で再現したバーチャル平安京を利活用しながら、〈京都学〉のひとつの見本を示してくださった。京都学専攻に着任して間もないわたしにとって、まことに、示唆に富んだものだったが、先生の〈京都学〉がどのような全体像をもつものであったか、十分に聞くことは叶わなかった。わたしたちの責務は、先生の軌跡をたどり、〈京都学〉のありかたを学ぶこと、そこから、〈京都学〉の可能性をひらいていくことに他ならない。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

注

- 1) 山田忠男『随筆京都学のすすめ』(別表参照)3頁
- 2) 薄雲鈴代『歩いて検定 京都学』(別表参照)3頁
- 3) 立川美彦『京都学の古典『雍州府志』』(別表参照)163頁
- 4) 京都造形芸術大学編『京都学への招待』(別表参照)所収、村井康彦「京都学事始」4頁
- 5) 別表参照。以下、別表に収めた図書・論文には、特段の注記を付さない。
- 6) 「Wissenschaft」が添えられているのは、ドイツ観念論哲学、ないし、ドイツの政治家であったヴィルヘルム・フォン・フンボルトの議論をふまえるか。エリック・アシュビー(島田雄次郎訳)『科学革命と大学』(玉川大学出版部、1995年7月)39頁—43頁を参照。
- 7) 小林丈広「現場からの史学史を目指して」(同編『京都における歴史学の誕生—日本史研究の創造者たち—』ミネルヴァ書房、2014年4月)
- 8) 野田正彰「京都からの手紙 「京都学」なるものの不思議」にも、〈京都学〉への批判があり、ばんぼとしあき『たかが京都されど京都 京都「よそゆき」文化論考』(丸善京都出版サービスセンター、2005年9月)には、「市内の大学では、京都学なるものが、いそいそと講じられていて、けっこう人気を博しているから、おそろしい。」(1頁—2頁)とあった。〈京都学〉に対する説明の不足が招いた結果であると自戒したい。
- 9) 「地域学」のもつ意味は多様である、といわれる。米地文夫「生涯学習における「自地域学」と社会科教育における地理分野—生涯を通じて身につける学力とは何か—」(『社会科教育研究』69、1993年10月)

は、地理学の地誌や地域研究 (Area Studies) など、複合的な意味をもつ「地域学」のなかであって、自らが住む地域について学ぶ「地域学」を「自地域学」と名づけ、区別している。高野岳彦「自地域学ムーヴメントと「地域学」の分類試論」(「地理」53 (6)、2008年6月)は、国立情報学研究所が提供する学術論文検索サイト CiNii や科学研究費助成事業データベースなどを統合検索できる GiNii (平成26年〈2014〉3月にサービス終了) の検索結果を利用して、地域研究 (Area Studies) と地域科学 (Regional Science) から、学校教育の地域学習、自地域学、そして、地元学への推移をグラフで示すとともに、これらの相互関係を図式化している。本稿では、この自地域学のことを、たんに「地域学」と呼び、地誌や地域研究 (Area Studies) と区別する。

- 10) 内山節・赤坂憲雄・田口洋美「座談会 地域を生きる思想 どこを魂の帰る場所と考えるか」(「季刊東北学」6、2006年1月)による。また、廣瀬隆人「地域学・地元学の現状と展望 その分類学的考察」(同上)は、地方自治体・民間団体・高等教育機関といった推進主体によって「地域学」を分類し、個々の趣旨や活動内容を俯瞰する。「地域学」の簡単な見取り図にもなっている。同「地域学に内在する可能性と危さ」(「都市問題」98 (1)、2007年1月)も参考になる。
- 11) 金安岩男「「山形学」遊学世界」(「現代のエスプリ」344、1996年3月)は、山形県で展開された「山形学」の基本的性格として、(1) 科学あるいは学問としての「山形学」、(2) 運動あるいは活動としての「山形学」、の2つを挙げ、(1) について、記述的・羅列的な百科事典・博物誌 (ヤマガタグラフィ) ではなく、科学的で有機的な統一性・体系をもつもの (ヤマガタトロジー) でありたい、という。前者は、**B 知識としての〈京都学〉**、後者は、**D 学問領域としての〈京都学〉** の分類に似る。
- 12) 『財団法人大学コンソーシアム京都設立10周年記念誌』(財団法人大学コンソーシアム京都設立10周年記念誌編集委員会、2004年11月) 89頁—91頁
- 13) 「季刊学術コンソーシアム通信」(5、2003年寒露)
- 14) 『大学コンソーシアム京都 第2ステージにむけて』(大学政策委員会、2004年1月) 19頁
- 15) 『大学コンソーシアム京都 第3ステージにむけて』(大学政策委員会、2009年1月) 25頁
- 16) 『大学コンソーシアム京都 第4ステージプラン』(大学政策委員会、2014年3月)
- 17) 「大学コンソーシアム京都」の事業は、同ホームページ <http://www.consortium.or.jp/> で閲覧することができる。
- 18) 『北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告』(北山文化環境ゾーン整備推進委員会、2009年10月) 11頁—12頁
- 19) テリー・イーグルトン (大橋洋一訳) 『文学とは何か—現代批評理論への招待 (上・下)』岩波文庫・岩波書店、2014年8月—9月)
- 20) 『旅の思い出』(JCB のれんの会、1969年11月)。児玉実用 (明治38年〈1905〉—平成5年〈1993〉) は、英文学者、詩人。同志社大学の教員を務めた。
- 21) 奥野健男『文学における原風景 原つば・洞窟の幻想』(集英社、1972年4月)、磯田光一『思想としての東京 近代文芸史論ノート』(講談社文芸文庫・講談社、1990年3月)、前田愛『都市空間のなかの文学』(ちくま学芸文庫・筑摩書房、1992年8月) は、場にかかわることばやイメージがもたらす問題を究明した好著である。

(本学文学部助教)

別表

	著者・叢書名	書名・論題	出版社・所収誌	刊行年月
1	山田忠男	『随筆京都学のすすめ』	洛味社	1973年12月
2	駒敏郎	『女子大版京都学入門』	名古屋豆本	1987年10月
3	立川美彦	『京都学の古典『雍州府志』』	平凡社	1996年7月
4	芳賀徹・赤坂憲雄	「東北学と京都学」	「まんだら 東北文化 友の会会報」5	2000年9月
5	芳賀徹・大谷晃一	「『京都学』と『大阪学』どう考える」	「財団法人大学コンソー シウム京都会報」9	2001年1月
6	芳賀徹	「京都学への提言—江戸東京学の経験 から」	「都市研究・京都」13	2001年3月
7	岡田知弘	「地域学の現状と課題—「京都学」構 築のために」	「都市研究・京都」13	2001年3月
8	辻ミチ子	「幕末維新の「京都学」 松尾多勢子」	「霊山歴史館紀要」14	2001年4月
9	志村ふくみ・芳賀徹	「誌上談義「京都学」 伝統と現代—色 について—」	「瓜生通信」18	2001年5月
10	山上徹編	『おこしやすの観光戦略—京都学の構 築にむけて—』	法律文化社	2001年7月
11	今井圓明・マタイス・ アンセルモ	「対談 人間学としての宗教学、そし て「京都学」へ」	「財団法人大学コンソー シウム京都会報」10	2001年7月
12	京都造形芸術大学編	『京都学への招待』※3	飛鳥企画	2002年4月
13		『“京都学”のすすめ』	京都総合経済研究所	2002年5月
14	野田正彰	「京都からの手紙 「京都学」なるもの の不思議」	「エコノミスト」80(26)	2002年6月18日
15	井上正	「私の京都学1 “京都学、—美術史の 場合について—」	「瓜生通信」24	2002年10月
16	上田正昭監修・芳賀 徹・富士谷あつ子編	『京都学を学ぶ人のために』	世界思想社	2002年11月
17	中村順一	「『京都学』—世界への発信」	上田正昭監修・芳賀 徹・富士谷あつ子編 『京都学を学ぶ人のた めに』世界思想社	2002年11月
18	森浩一	「僕の考える京都学」	上田正昭監修・芳賀 徹・富士谷あつ子編 『京都学を学ぶ人のた めに』世界思想社	2002年11月
19	小川後楽	「私の京都学2」	「瓜生通信」25	2003年1月
20	学術コンソーシウム設 立記念宗教学シンポジ ウム報告書	『京都学—宗教都市京都からのメッ セージ』	大学コンソーシウム京 都	2003年3月
21	尼崎博正	「私の京都学3 石への思い」	「瓜生通信」26	2003年4月
22	中路正恒	「私の京都学4 「京都」とは何か？」	「瓜生通信」27	2003年7月
23	河内将芳	「私の京都学5」	「瓜生通信」28	2003年10月
24	前田亮・佐古愛己・杉 橋隆夫	「京都学デジタル図書館の構築と多 言語情報アクセス」	「じんもんこん2003 論 文集」	2003年12月
25	中ノ堂一信	「私の京都学6 生活の原風景の一つ として」	「瓜生通信」29	2004年2月

26	鎌田東二	「私の京都学7 平安京と「平治」の乱」	「瓜生通信」31	2004年8月
27	森浩一編	『京都学ことはじめ—森浩一12のお勉強』	編集グループ〈SURE〉	2004年10月
28	山田邦和	「『京都学』と『山城学』」※4	『地域学から歴史を読む』大巧社	2004年11月
29	畠中光享	「私の京都学8 日本画の葛藤」	「瓜生通信」32	2004年11月
30	天野太郎	「教育を通じた重層的な地域へのまなざし—「京都学」」	「大学時報」54(301)	2005年3月
31	村井守	『京都学入門—京都の風土と文化を考える』	川崎市生涯学習財団かわさき市民アカデミー出版部	2005年11月
32	ウスビ・サコ	「“比較京都学”エッセイ 世界の中の京都 日本とマリを結ぶ住環境デザイン」	「季刊京都アカデミア」8	2005年冬
33	京都アカデミア叢書1	『京都学術共同研究機構設立記念フォーラム 京都学 みやこに貢献するアカデミズム』	大学コンソーシアム京都	2006年3月
34	川村覚昭	「『京都学』構築のための教育文化資料研究」	「京都産業大学論集 人文科学系列」35	2006年3月
35	知恵の会編	『京都学の企て』	勉誠出版	2006年5月
36	野田泰三	「“比較京都学”エッセイ 世界の中の京都 米沢で考えた京都と地方 上 杉家伝世品を素材に」	「季刊京都アカデミア」9	2006年春
37	中元崇・久保田千雅子	「『京都学』のプラットフォームを築く—大学コンソーシアム京都の取り組み—」	「都市問題」98(1)	2007年1月
38		特集「京都学 (Intercultural Kyoto Studies)」	「日本語日本学研究」6	2007年4月
39	大西辰彦	『やさしい京都学』	のぞみ	2007年4月
40	大迫力	「あたらしい京都のにおい 其の二 教授と学生が休み時間におしゃべる?いえ、京都の教科書を作ってるんです」	「京都に住まえば…」'07夏号(なごみ7月号別冊)	2007年7月
41	薄雲鈴代	『歩いて検定 京都学』	山と溪谷社	2007年8月
42		『立命館大学文学部京都学関連ゼミナール 2007年度研究発表会学生発表論文集』	立命館大学文学部	2008年3月
43	立命館大学文学部京都学プログラム編	『京都「に」学ぶ』	立命館大学文学部	2009年3月
44		『京都学 前衛都市・モダニズムの京都展 1895-1930』	展覧会図録・京都新聞社	2009年6月
45	鎌田東二	「鎌田東二の霊性の京都学—京都の生態智を求めて—」	「月刊京都」698～継続中	2009年9月～継続中
46	林久美子	「報告 シンポジウム「ひとつの京都学 美術・工芸・建築・都市」」	「ジャポニスム研究」29	2009年11月
47	知恵の会編	『京都学を楽しむ 古都をめぐる33の講座』	勉誠出版	2010年7月

48	NHK テレビテキスト	『極める！ 友近の温泉学 西田尚美の京都学』	日本放送出版協会	2010年8月
49		「新資料館と国際京都学センター」	「総合資料館だより」171	2012年4月
50		「『京都学へのいざない講座—京都力を探る—』のご案内」	「総合資料館だより」172	2012年7月
51		「平成24年度京都学へのいざない講座 京都力を探る」	「総合資料館だより」173	2012年10月
52		「京都学へのいざない講座」	京都府立総合資料館	2012年
53	平成24年度京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 研究成果報告書	『学際的・国際的視点にたつ京都学構築のための方法的探究』	京都府立大学	2013年3月
54	山田邦和・天野太郎	「『京都学』を学ぶための文献ガイド」	「同志社女子大学現代社会学会現代社会フォーラム」9	2013年3月
55	平成25年度京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 研究成果報告書	『現代版『京童』へのアプローチ—「国際京都学」研究における京都府立総合資料館所蔵古典籍活用の可能性—』		2014年3月
56		「学長インタビュー—京都府立大学築山崇学長 “京都学” “和食文化” “産学公連携の強化”—躍動する府立大学を目指す」	「文部科学教育通信」353	2014年12月8日
57		特集「京都学入門」	『SINRA』2016年1月号、天夢人	2015年11月
58		「平成27年 第2回国際京都学シンポジウム「東寺百合文書の現在と未来」」	「資料館紀要」44	2016年3月
59		『国際京都学シンポジウム「ユネスコ世界記憶遺産に向けて」開催報告書』	京都府文化スポーツ部文化政策課	2016年3月

※1 国立国会図書館や京都府立図書館の蔵書検索、CiNiiなどで検索でき、いっばんに取得可能なものにかぎった。

※2 この他、本稿では考察の対象から省いたものの、公的機関による生涯学習講座や公開講座、新聞などで〈京都学〉が用いられることもあり、インターネットで検索してみても、多くの〈京都学〉にふれることができる。また、現在ではインターネットから削除されてしまった記事であっても、過去の記事を保存するウェブアーカイブで確認できるばあいもある。たとえば、公的機関を中心に収集をおこなう「国立国会図書館インターネット資料保存事業 (Warp)」<http://warp.da.ndl.go.jp/> には、立命館大学において、平成24年度 (2012) の学域・専攻制度の導入によって発展的解消を遂げた「京都学プログラム」の記事が保存されている。同様の事業として、「Wayback Machine」<http://archive.org/web/> などがある。

※3 村井康彦編集責任『京都学』(京都造形芸術大学、2002年4月)も同じ内容になっている。

※4 『第11回春日井シンポジウム資料集 春日井に集う『地域学』 関東学・東海学・飛鳥学・京都学・日本海学』(春日井シンポジウム実行委員会、2003年10月)にも、若干の変更はみられるものの、ほぼ同じ内容の論文が所収されている。